

綴葉

ていよう

'24 10

No. 431

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

朝比奈秋著『サンショウウオの四十九日』

ロバート・パーカー著、栗原麻子、竹内一博、佐藤昇、齋藤貴弘訳『古代ギリシアの宗教』

特集／京大作家インタビュー（第四弾：青羽悠）

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

 univ. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

限りなく薄い境界線——芥川賞受賞作

サンシヨウウオオの
四十九日

朝比奈秋著
新潮社



「自分だけの体を持っている人はいない。みんな気がついていないだけで、みんなくっついて、みんなごんがらがっている。自分だけの体、自分だけの思考、自分だけの記憶、自分だけの感情、なんでものは美のところが誰にも存在しない。いろんなものを共有しあっていて、独占できるものなごひとつもない。」

* * *
「結合性双生児」という言葉自体は、昔から知っていた。アビー&ブリタニー姉妹が取り上げられているドキュメンタリー番組を見たことがあったからだ。一人分より少しだけ幅の広い肩に、二本の首がついている。胴体がくっついた状態で生まれた、双子の姉妹。彼女たちの目から見える世界は、きっと私の見ている世界とはかけ離れているのだろうと、そんなふうに思っていた。

本作の主人公・濱岸杏と瞬の姉妹も、結合性双生児だ。しかし二人は、アビー&ブリタニー姉妹とも、腰部がくっついていないベトちゃんドクちゃんとも違っている。

「私たちは、全てがくっついていた。顔面も、違う半顔が真っ二つになって少しずれてくっついていて。結合性双生児といっても、頭も胸も腹もすべてがくっついて生まれたから、はたから見れば一

人に見える。」

左半身は姉の杏で、右半身は妹の瞬。姉妹は二人で一人分の体を共有している。体は一つでも、意識は独立している。性格も趣味嗜好もそれぞれ違って、両親はどちらが喋っているか聞き分けることができる。

しかし脳すら共有している二人は、お互いの思考や感情が混ざり合い、ときどきどちらの考えなのかわからなくなるらしい。姉妹の視点を切り替えて進む文体には、頻繁にもう片方の思考が流れ込み、読者も混乱させられる。

肉体も思考も感情も共有する二人の境界線はどこにあるのだろう。そして、片方が死んだとき、もう片方はどうなるのだろう——本作は、伯父の死をきっかけに、姉妹が自分たちの死について思いをめぐらせる、何の変哲もない四十九日の物語だ。

* * *
極めて特殊な人物設定ながら、本作では、日常を超えた劇的な大事件は起こらない。二人がぶつかる問題——自分とは何か、自分らしきとは何かという悩み、同級生たちのからかいや揶揄、風邪をひくこと、親戚の死に衝撃を受けること——こういったことは、私たちの人生にも少なからず登場する。杏は、瞬との境界の薄さというかつての悩みを、自分たち特有のものではなかったと断じる。他の人と違って、自分たちはあまりに直接的にくっついていただけだと。姉妹の目線で綴られる日常は、きつと、ドキュメンタリー番組のカメラには映らない。

(一四四頁 税込一八七〇円 7月刊)

古代ギリシアの宗教——絶望的な異質さを前にして

古代ギリシアの宗教

ロバート・パーカー著

栗原麻子、竹内一博、

佐藤昇、齋藤貴弘訳

名古屋大学出版会



「日本人は無宗教だ」というありふれた言説に倣い、「古代ギリシア人は無宗教だ」と述べたとすれば、極論の誇りを免れまい。我々はオリュンポス神に代表される信仰の対象、あの壮大なパルテノン神殿を知っているため、古代ギリシア人を無宗教と考へることはな

い。しかし、彼らには聖典も、教祖も、教会機構も存在していない。それにもかかわらず、何故彼らは神々を信仰し、祀ることができたのだろうか？

* * *

古代ギリシア宗教を理解する試みには、数々の障害が立ち塞がる。そのうちの二つが、集団の、あるいは個人の宗教的経験の多様性や一貫性の欠如である。例えば、神々をなぜ信じていたのか、という問いがある。人智を超えた奇跡や啓示の存在は、広く神々の実在を示す証拠として用いられる。しかし、古代ギリシアにさういった要素は明らかに不足している。神話は確かに、神々の存在を伝えてはいたが、それは広範にわたたり、異伝に溢れたものであった。神話をどこまで信じるのか、ということには個人の選択の余地があり、祭祀や儀礼に対する考え方も、ある程度の自由が容認されていた。

また、ゼウスが天を、アプロディテが愛を、ポセイドンが海を、

等々ギリシアの神々には各々に結びついた権能があることは周知の通りである。しかし実際には、アプロディテが航海を、またポセイドンが馬を司る神として祀られることもあった。これをどう理解するべきなのか？ 著者はここで、構造主義的な、一貫した説明原理の有効性を紹介した上で、その限界も指摘する。実際に神々の権能が決定されるにあたっては、結局のところ歴史的な偶然性や、当時の人々の需要が大きく影響していた。神々の神性は合理的で一貫したものではなかった。しかしそのことが、古代ギリシア人の多様な経験に対処する柔軟な手立てともなったのだ。

* * *

本書では他にも、ポリスにおける祭祀、供犠、英雄崇拜、祝祭、呪詛、秘密結社等々、古代ギリシアを理解するうえで欠かせないトピックが白押した。それでも本書を読んで、古代ギリシアの宗教に関する全てを理解できるわけではない。そもそも、古代ギリシアという「絶望的に異質」な存在を前にして、我々が知ることのできる事柄は限られている。しかし著者は、留保や両論併記を多分に挟みながらも、可能な限りで古代ギリシア宗教の実像を解明しようと試みる。ある仮説を紹介して、修正する、という論を何度も繰り返して、少しでも真実らしいものを掴もうとする。きっとそうすることによってしか、古代ギリシアという決して一枚岩ではない存在に迫ることができないのだ。遙か時の彼方に遠のいてしまった古代ギリシア人たちの営みに対する、真摯な姿勢が垣間見える。

(四四八頁 税込六九三〇円) 8月刊 (荒砥)

〈特集〉京大作家インタビュー

本誌の恒例企画、「京大作家インタビュー」！ 第四弾は今注目の若き京大作家、青羽悠さんにお越しいただきました！

青羽さんは、2016年に小説すばる新人賞の史上最年少受賞作『星に願いを、そして手を。』で高校生にして作家デビュー。2018年度に京都大学総合人間学部に入學し、昨年度には同大学院総合生存学館（思修館）を卒業されました。

今年の4月に京都を舞台にした青春小説『22歳の扉』（以下『扉』）を発表した青羽さん。その表紙と同じ場所で、京都という街で過ごした時間、『扉』の執筆に込めた想いと転機、そして自由の意味についてじっくりと語っていただきました。最も「リアルタイム」な京大作家、青羽さんの背景と魅力に迫ります。（浅煎り・水炊き・コーク）



——本日はよろしくお願ひします。さて、青羽さんが京大の総合人間学部、総合生存学館に進学されたのはなぜなのでしょうか。

高二か高三で行ったオープンキャンパスは事前予約制で、総人以外はもう埋まっていた。でも総人は事前予約ではなくて、手を上げたら来ていい。懐深さか高度な策略なのかは分かりませんが……というので吉田南のあの感じも見て、ビビッときました。

その理由も今ならわかるけど、高校生の頃は何も方向性を持ってなかった。むしろ、何をやるかを探す大学生生活にすればいいと思っていたので、未確定なまま飛び込めるところに行きたいと思って総人にしました。こういう人は多いかもしれない。で、何も見つからなかったら総合生存学館に行ってみたらいいところはあるが（笑）。

——総人ではどんな出会いがありましたか。

僕は自然科学系の酒井^{サカイ}先生の研究室にいました。地球流体力学がご専門で、研究者というよりもアイデアマン。京大だから許されていたというか、変人講座とかやっていた方ですね。で、先生のラボみたいなの、今思えば私有化した空間に二回生くらいから居候していたんですが、酒井先生に「俺はお前が見たいことに詳しくないから他の先生を見つけてこい」と言われて。

その時に僕が興味あったのがネットワーク科学。地球科学にも複雑系っていう概念があったので、そこにこじつけて、誰も教えてくれないなかで自分なりにやっていました。

——ネットワーク科学や複雑系とは、一体どのような学問なのでしょうか。

二回生の時の古本祭りで買った『新ネットワーク思考』（NHK出版）から、いわゆる複雑系（コンプレックス・サイエンス）という学問に興味を持ち始めました。僕は構造やシステムを見るのが好きなんです。ネットワーク科学とは微分積分みたいなもので、道真なんです。物と物が繋がっていけば人間関係から電線まで、どんなものもネットワークとして扱えます。そのなかの点自体というよりも、それらが繋がった時にどうやって機能を得るか、そのつながり自体に重みがあるわけです。

また、もちろん還元主義は大切ですが、一つのことを各要素に分解・還元して理解できることは少なそうだな。それよりは人間の集団でも、あるいは知識のしなやかさでも、それらがつながった時に初めて発揮される力があるかと思っています。そのようなつながりや「場」のような考えや感覚に、学問として触れてみたいと思っていました。

《小説も研究も人生も同じエンジンで》

——ここからは、青羽さんの作品についてもお伺いしたいと思います。小説を書く際はテーマが先行していると他のインタビュー等で仰られていましたが、テーマの決定には自身の学生生活も関係しているのでしょうか。

本を書く時は最初にこういうことを書きたいというのはありますね。それは人生のなかで常に出てくるもので、今抱えている悩みなり気づきなりを考えた時に「場」や「喪失感」「夢」といったテーマが出てくる。それは学生時代と不可分なものでしたね。大学時代に自分を揺さぶるような経験があった、そこから逃げなかつたからこそこんなに書けたんだと思います。

——作品には、青羽さんの研究されていたネットワーク理論も登場しますね。

学問って思想だと思っんですよ。体系的でかつちりしたものであれど、そのドライバーになるのは世界に対する自分の感覚だったりする。目の前にあるのは数式なりコードなり堅物なものだけれど、そこに色を付けるのが思想で、そこでは小説も学問も経験も一体になっている。そこから小説が出てくるし、研究も進む。同じエンジンでやっていますね。

——決定したテーマに対して、あらかじめ答えを用意しているのでしょうか。

ゴールはなんとなく決まっていますね。ただ、それだと広がりないことに気づいたんです。だから今では、ゴールを決めるけれども迷った時に参照するに留めている。書いている間の揺れ動きが出てくると良いですね。書きながら考えたい。伝えたいことがひとりで言えたら何百頁の言葉の連なりもいらぬし、物語っていうかたちも要らない。

そんなことを考えているから、書くのが遅いんですよ(笑)。特に『扉』は書くのが大変でした。今までは、立体的なあり方が好きなので、複数の登場人物を登場させて物語を組んできたわけです。でもそれはもうある程度でできるなとわかったので、今回は主人公と一緒に悩みながら書いていきました。書き始めたのは学部が終わるくらいに時期で、当時はまだ結論に達していなかった。自分の卒業論文はこれだと思ってる(笑)。

この小説で誇りたいのは、リアルタイムで学生生活を送りながら、プロの作家としての技巧を使って書くことができたことです。リアルタイムの苦悩を物語としての強度と合わせて作ることができた。そんな大学小説、しかも京都の小説は唯一無二だと思



います。

《青春と成長 もしくは円環》

——『扉』は学生生活と並行して執筆されたそうですが、自分が真つ只中にいる生活を描くにあたって、主人公の視点はどのように設定されているのでしょうか。執筆の際に懐古的な目線というものはありましたか。

いや、同時的な視点ですね。この小説を書き始める時に決めていたのは、青春小説——一人の人間が、何も持たないところから成長してゆく小説——を書くことでした。だから、常に主人公が事件の渦中ですね。成長によって世界が開ける感覚、そしてそれをまた覚えていくけど、同時にいろんなことを経験して、前にあったような混乱がじきになくなってしまう、青春が終わりに差し掛かる感覚をずっと持って書いていました。先ほどの「リアルタイム」というのはそういう意味でもあります。

——形式について、『扉』では冒頭と結末がリンクしていて、繰り返し、円環のモチーフが気になりました。円環と成長は、一見すると異なったものに思えますが、作中ではどのようにつながってくるのでしょうか。

例えば先ほどもあったように、青春の終わり、忘却していく感じを肌身に覚えながら

の小説を書いていたんですよ。それも、僕自身が経験を通して成長してきたからなのかもしれないですね。過去の悩みは、今は消えてしまっていたとしても、無くなったわけではない。それはただ忘れられているだけで、人生のどこかで同じようにまた現れてくるんだろななと思っています。その時にどこかでこういう感覚を経たように思うことが成長で、それは忘却や喪失と結びついているからすごく切ないなとも思うんですよね。

でも、成長と円環は一見真逆に見えても、絶対一緒だと思います。『扉』の「生きるとってことはそれだけで何も忘れないってことだよ」(二二七頁)という言葉。これを書けたのが今回本当に嬉しかったです。経験したことは体に眠っていて、何かの折に呼び戻されるものだと。それがこの言葉にスン、と出て、すごく嬉しかった。成長は忘れていくことの裏返しなんだけど、忘れていくから忘れてないって言いたい。その意味で、同じ場所を巡りつつも変化していく、螺旋的な感覚にも近いと思います。

——作品全体の形式だけでなく、個々の場面においても共通した技法が用いられているわけですね。

小説において構造がいかに大事か、ということですよ。今回『扉』では、愚直に感覚に

従おうと決めて書いて、その結果として構造が現れた。それは自分にとって嬉しいことです。構造に限らず、小説のテクニクというものが、小手先のものではなく人間の深いところに根ざしたもののだなと感じます。

《読者への信頼》

——今回はご自身の感覚に忠実に書かれたというのですが、最新作を含め、執筆の際に具体的な読者のイメージを想像されますか。

具体的なもの実は考えていません。ただ、僕自身が一番面白いと思える小説を書いているという自負があります。僕が面白いと思うものに対して、誰かも絶対面白がってくれるだろうって信頼はあるんですよね。だから僕なりのベストを尽くせば、読者にも読んでもらえるだろうっていう信頼を持って書いてます。

例えばアビュ作『星に願いを、そして手を』(集英社文庫)では夢、二作目『凧に溺れる』(PHP研究所)ではずっとあり続ける淡い憧れみたいなもの、そこへの意識を書いてみたら、みんなもわかるって言ってくれたんですね。僕がインパクトを受けたり動



揺していたことを、みんなも感じているんだと思えた。それがすごい安心したというか、人間って普遍的なんだなと思って、それが書く喜びに繋がってるような気はしますね。

《京都から東京へ》

——『扉』の主人公は最終的に京都を離れますが、青羽さんも同様に今年から東京で就職されていますね。東京はいかがですか。

会社は目的や責任があるし、ちゃんと成果や利益が求められる場所ですよね。学生はサービスの受益者だと僕は思うけど、社会に出るとそうではない。だから、新たな体系に身を置いて、一旦そのルールを嚙呑みにしてみるといのはシンプルに面白いですね。

ただ今の悩みとしては、仕事で仕事で独立しすぎている。僕は專業の小説家というよりも、人生の副産物的に小説が生まれると思っ

ているんです。自分の意識のサーフ地点や横で書き留めておく備忘録。僕は小説で金勘定したくなくて、小説のことを好きでいたかったので就職しました。けれど、今は仕事が生を暴力的に損なっていくようで、これが仕事の残酷さなのか、とは思います。

——『扉』の舞台でもある京都という街は、僕は東京に行くまで、東京というイブズムが

そこにあると思っていたんです。だから練習のためにぐるりの「東京」とかいっぱい聞いて。でも実際に行ってみると、意外に何も無い。東京っていう言葉は記号的すぎて、あまりに何も語らないんですよ。皆が好き勝手に自分の東京を決めて持ち寄っている。

それに対して、京都はイメージを持っているのが良いなと思います。京都には明らかに色がある。やはり悠久の土地であり、根本にあるものは何も変わらない。さっきは螺旋になぞらえたけど、京都は二次元というか、同じ場所に戻ってくるんです。加えて、京都は想像力がある街、物語が生まれる街だと思います。そこには人間の力も、自然や神様の力もある。森見作品とかその体現だし、左京区とかだけかもしれないけど、何が起きて「まああるか」と頷かせる力がある。

あと、東京は頑張るほど偉い競争の街ですよ。評価されて生計を立てたり、権威を持つことに意味がある。でも、京都は頑張るのがダサい街なんです。もちろん京大にも無限に頑張ってる人がいるけれど、彼らは好きだから、自分の興味関心や楽しさを追いかけた結果、褒められちゃいましたよ。その人が持つ愛情と思いの強さに価値が置かれていてる気がします。競うとしたら意義深さをもってだし、そこをいかに言葉にでき

るかを問われているような街ですよ。

——その京都を離れて東京に向かう時の思いとは、どのようなものだったのでしょうか。

率直に言えば京都は六年でいっぱいだったかな。やっぱり僕はどこか愛しきれなかった人間でもあって。自分の好きなものが見えなくなってしまうと、「同じ場所に帰ってきたくない」とも感じてしまった。なので、一旦京都を出て東京へ向かう選択をしました。今は僕の周りにある東京ってものをもうちょっと見てみて、どういう軸足を置くかを考えたいですね。ただ、京都に残る人もそれはそれで正しいし、カッコいいと思ってます。



《自由の空間と場を生み出す力》

——「罪」では学生の自治をめぐるシーンも象徴的に描かれています。タテカンが並ぶ光景を知るほほ最後の世代として、現在の京大についてはどのようにお考えでしょうか。

居心地のいい空間、自分が良いと思った場所を自分で守ることが大切なのだと思います。思想や大きい体制について語るのも結構だけど、僕はやっぱり手の届く範囲の世界の価値を最大化してほしいし、守ってほし

いし、さらに生み出してほしい。それが難しくなっているから、「自治の衰退」などと言われてしまうのではないかな。

やはり、「場」が与えられるものだという意識がありすぎるんじゃないかと思います。京大には、サービスの受益者に留まることを良しとせず「無いなら自分たちで作ればいい」という動きがあってもいいはずだと思います。自由が狭まるのが嘆かれもするけど、それはもう世の摂理で、使われない機能は減るわけですよ。むしろ自由に組み込まれた最適化だと思っ。だから、そこに対して愚直さや疑問があるのなら、自分から広げる動きを作った方がいい。自分の場を自分で守ることさえ変わらなければ、何も腐らないはず。別にタテカンではなくてもいいですし、そういう動きを大切にしたら、ここにいる四年間六年間はいいものになると思います。

あと、名前を出さないけど面白い場所は絶対あるから、みんなもっと冒険したらいいと思います。変なもの、自分と相容れないものに心を開いて。それができない人が大学に来て多様性を語るのにはダメなので。辟易するくらいのも多様性を見てほしいと思います。

——最後に京大生にメッセージを。

楽しく苦しい、誇り高き京大生活を！

(聞き手：浅煎り・水炊き・コーク)

新刊コーナー

読めない文字に挑んだ人々
ヒエログリフ解読1600年史

宮川創著、河合望監
山川出版社



一九世紀初めにシヤンポリオンがロゼッタ・ストーンを解読するまで、(エジプトの)ヒエログリフは「読めない文字」であった。紀元前四千年紀のプロト・ヒエログリフから考えると、エジプト語の書記記録は世界最長と言われる。しかし、この長い歴史の半分以上の期間使用されていたヒエログリフは、たった二〇〇年ほど前まで誰にも読まれ得ない記録であったのだ。

二部構成の本書は、前半部でヒエログリフの理解を目指す。古代エジプトの文字体系と言語、その歴史がまとめられている。後半部では、「読めない文字」ヒエログリフの解読に挑む人々の軌跡を辿る。シヤンポリオンの功績は、やはり偉大だ。しかし、そこに至るまでに積み重ねられた文献の二つ一つが、なくてはならない偉大な一歩であると思われる。シヤンポリオン以前の二三名と後の二〇名。

それぞれの研究が詳細に語られ、そのすべてが繋がっていることが理解できるだろう。

広く初学者に扉を開く、優しい語り口の本書であるが、その情報量は想像以上だ。そんな中でも、現在明らかなこと、その時点で理解されていたこと、著者の考察が明確に書き分けられ読みやすい。庄巻なのは前半部の文字体系の記述だ。なぜヒエログリフがこまごまで解読され得なかったのか身をもつて理解できる。だがそれだけではない。第二章まで読んだ読者は、「読めない文字」解読の喜びの一端を味合うことができるのだ。(ひるね)

(二五六頁 税込二二〇〇円 7月刊)

もっと調べる技術
国会図書館秘伝の
レファレンス・チップス2

小林昌樹著 皓星社



知らないことを正確に知ろうとするのは難しい。特に最近では虚実入り混じった情報が増加しており、ちょっと検索を行うだけではなかなか信頼に足る情報源に辿り着けない。こうした困難の助けになるのが本書だ。

著者は、国会図書館(NDL)でレファレンス

ンスを二五年もの間行ってきた調べもののプロ。長年の業務で培われた技術をまとめたチップス集が本書だ。前置ではレファレンス一般の考え方や、新聞や官報を含めた文献の調査方法が軸となっていた。対して本書では、今年に入ってリニューアルされたNDLサーチを利用する技法が中心となっている。NDLサーチとは、NDLのデジタル化された蔵書について検索できるサービスのことであり、なんと今回のリニューアルによって戦前の図書も多くが全文データ化され、本文に至るまで検索可能になっている。画面のスクリーンショットと共にこの膨大なデータの扱い方や、語誌の調査といった一風変わった利用方法までもが紹介されている。特に、NDLのレファレンサーが選んだ現役の文献集を調べる手法は必見だ。更には、アイドルや成人向け図書といったサブカルチャーに関するディープな調査技法まで。本書で紹介される複数の手法を多面的に利用することで、分野を超えた知の収集が可能になるだろう。

情報が進んだことがかつては容易にアクセスできなかった資料に手が届くようになってくる。しかし、そのためにはちょっとしたコツがいる。情報の海で溺れないよう、お守りとして持っておきたい一冊。(筏)

(二二八頁 税込二二〇〇円 6月刊)

恐い怪談

松原タニシ著
二見書房

前を歩く老爺の手から封筒が落ちた。

声を掛けようと咄嗟に拾う。否封筒では

ない。べとつく液体で汚れた紙層だ。そこに無数の蟻が蠕集している。——本書を読むうち、忘れていた記憶がよみがえった。あれは何だったのかと首を傾げるような奇妙な記憶の断片を誰しも一つは持っているのではないか。

怪談百話を収録した本書のタイトルは『恐い怪談』。重複表現が違和感を誘うが、そこに著者の狙いがある。著者は「事故物件住みます芸人」こと松原タニシ。番組企画を発端に事故物件に住み続けること十数年、実体験に基づく怪談語りを活計としてしている。芸人の怪談本なんて、と素通りするのは勿体無い。確かに初期作は商業色が強い。しかし著作を重ねる度、独特の思索は精彩を帯び無二の存在感を放っている。

七作目となる本書では、怪異が日常化し、恐怖を克服（あるいは麻痺）した著者が改めて問う。「恐いって何だろう」。これは読者へ

の懸念な問いかけであると同時に、切実な自問でもある。百話に底流する問いとタイトルとの意図的矛盾が不穏な渦を生む。何に對し恐怖を感じるか、それは極めて個人的で千差万別である。記憶に沈んでいた奇妙な断片を見つめ直したとき、私は「恐い」と思った。

著者の活動は全国への取材、知識人との対談、絵本の読み聞かせなど多岐にわたり、それら全てが執筆へと結実する過程を動画配信やラジオで知ることが出来る。アカデミズムとは異なる知的探究の姿、この稀有なエンタメをぜひ目撃してほしい。（投稿・瓶詰め）
（二七二頁 税込二六五〇円 6月刊）

日本写真論
近代と格闘した三巨人日高優著
講談社

写真を見るとき、

人はしばしば言葉で

失う。たゞそれが

衝撃的な事件の光景

でなかったとしても、むしろそれが何気ない

風景の写真であればなおのこと、写されたも

のを言葉で表現することは不可能だと感じる。

なぜなら《写真は意味の次元、記号の記録で

あることを突き抜けてしまう》からだ。本書はそんな写真の神祕を、木村伊兵衛、土門拳、濱谷浩という三人を通して論じた一冊である。取り上げられた写真家たちに共通するのは、日本という土地で営まれる生への深い洞察だ。木村の写した市井の人びと、土門の凝視した被爆者や仏像、あるいは濱谷の記録した雪国の暮らし……。そこには、現在に至るまで堆積してきた時間の重みが切り出されている。

写真を文字通りの生業とした彼らの生涯を辿りながら、著者は、そうして写真が断面として切り出す時間を、そこに写し出される生を言祝ぐ。ものが在れば、それが写る——そんな写真固有の視覚は、人間の知覚を超え、肉眼で眺めるだけでは取りこぼされる細部を抱きとめ、汲めども尽きせぬこの世界の豊穣を見る者に信じさせるのだ。

とはいえ。最初に述べたとおり、写真は言葉の次元を突き抜けてしまう。ゆえに本書が、そして評者がこうして言葉を積み重ねるほどに、空転している感は否めない。《世界は視えない底なしの深さとして蠢いて在って、視える表面が僅かに意味化されるに過ぎない》だからこそ、写真家はカメラを構えるのだ。本書の饒舌な文体は、そんな彼らの試みを逆説的に明かしている。

（水炊き）
（三三六頁 税込二四二〇円 6月刊）

いつか、アジアの街角で

中島京子／その他5人著
文春文庫



本書は、6人の著名な女性作家による短編集である。それが人と人との繋がりについての物語であると同時に、東アジア各国との関係を示唆させる。

「チャーチャンテン」では、香港で民主化運動に携わっていた一人の少女と、二〇年以上前に広東語を習っていた女性との会話形式で話が進んでいく。空気をさせる少女だが、今はもう見られないかつての香港の話をするうちに、少女は香港から日本に逃げてしまったことに対する後悔と後ろめたさについて話し出す。最近ではウクライナとロシアやパレスチナとイスラエルなど他のニュースに気を取られて、香港の民主化運動弾圧など、頭の片隅に追いやられていた自分があることに気が付いた。この小説の登場人物のように、大学や街ですれ違ふ人々の中には、様々なバックグラウンドを持つ人々がいるだろう。このような人々に対して常に考えが及んでいるわけではないが、簡単に忘れられるほど遠く存

在でもないはずであることを改めて認識させられた。

短編集だからか、評者は表紙を開いてから一度も手を止めることなく読み進めることができた。ミステリーを読み終わった後の爽快感や、アクションや冒険物語のようなワクワク感など、想像していたような感情の起伏はなかった。しかし、読み終わった後にじんわりと、ポカポカする温度感が広がる。勉学に集中しすぎて小説を手に取りなくなったあなたに、久しぶりに読む一冊としておすすめしたい。

(二〇八頁 税込七三七円 5月刊)

(フランチ)

ユードラ・ハニーセットのすばらしき世界

アニー・ライアンズ著
金原瑞人 西田佳子訳 アストラハウス



ユードラ・ハニーセットはロンドンに住む、八五歳の少し偏屈な老女。毎日の日課はスイミングにクロスワードパズル、ラジオを聴くこと。同居人は一匹の黒猫だけ。彼女には二つ大きな楽しみがある。それは――死ぬこと。彼女は尊厳死を強く望んでいる。

スイスのクリニックと手続きを進める彼女の隣に、とある家族が引っ越して来た。十歳になる娘のローズは、ユードラから見ればあり得ないくらいカラフルな服装をした、元気潑刺、天真爛漫な女の子。ローズは、ほとんど人と交わらずに暮らしているユードラの生活に、半ば強引に入り込んで来る。近所に住む老人スタンリーも加わって、ユードラは久方ぶりに外界と交わる生活を送る。しかしそれでも、尊厳死を望むユードラの決心はなかなか揺るぐことがない。

自分の人生を自分の意志で終わらせることへのこだわりは、どこからきているのだろうか？ ユードラが尊厳死を望むのは、彼女がこれまで歩んできた人生が関係している。物語は、現在(二〇一八年)と過去(一九四〇年)を交互に、彼女の人生をなぞるように進んでいく。詳細についてはぜひ本書を読んでいただきたいが、彼女がした数々の選択、そうあり得たかもしれない未来に対する後悔、諦念は誰しも身に覚えがあるに違いない。

「すばらしき世界」の原題は『The Brilliant One』である。ローズと出会う前のユードラにとって、皮肉どししか響かなかったであろうこのフレーズが、言葉通りの意味になるとき……。終わりよければ、すべてよし。

(四六四頁 税込二四二〇円 6月刊)

エブリデイ・ユートピア

クリステン・R・ゴドシー著
高橋璃子訳 河出書房新社

現代社会は格差や差別といった暴力で満ちている。なかでも私生活に最も近い領域、つまり家庭内において、女性は無償労働に従事している。そこに問題意識を持った著者は、古代から続くユートピア思想に着目した。なぜなら、プラトンの時代から、理不尽なこの世界で、人びとは理想の社会を思い描き生活を変革してきたからだ。本書では、今と違う未来を実現するために、古今東西のユートピア思想とその実践を再検討する。

一人の相手と結婚し、夫婦と子どもが一つの家に住み、子育てをすること。個人がものを所有すること。本書が挑むのは、こうした一見当たり前の社会規範だ。これらの「常識」は維持されるべきなのだろうか？ 数世帯が共に暮らす共同住宅は、家事労働を分担し衣服や家電をシェアすることで、生活の負担や費用を軽減している。保育園は母親を子育てから解放し社会化するユートピアの実践であった。核家族はキリスト教が権力を維持する

ため規範化したものであり、非婚主義や友情結婚、ポリアモリーなど、多様な家族の形がありうる。様々な時代・地域から実践例を取り上げて論を展開するからこそ、読者は実感をもってより良い生活のあり方を想像できる。

家父長制や資本主義の中で、現実が変わらないと思いつき、ユートピアを「夢物語」だと冷笑する——資本主義リアリズムが蔓延している。本書はこうした態度を正面から批判し、ラディカルな希望という武器を読者に託す。あらゆる常識を打ち破る活力を与えてくれる、前向きになれる一冊だ。(たいやき)

(二三八頁 税込二九七〇円 5月刊)

国家はなぜ存在するのか

ヘーゲル「法哲学」入門

大河内泰樹著

NHKブックス



大哲学者の著作の入門書は、用語や特有の概念の理解に重点が置かれがちであり、解釈や応用にはあまり紙幅が割られない。それに対し本書は、徹底して現代社会に軸足を置く。コロナ禍が浮き彫りにした、国家権力の私生活への介入という問題——ここを出

発点とし、著者・大河内はヘーゲルの国家論を読み解いていく。

コロナ禍に際して、多くの国が行動制限や予防接種の奨励・強制を行った。こうした私生活への介入はどこまで正当なのか？ これを考えるためには、そもそも国家がなぜ存在するのか、つまり、社会の中で国家が担う役割は何なのかを問わなければならない。大河内によるとヘーゲルは、近代社会における貧困問題に目を向けていたという。例えば、自由経済には自動調整機能があるとされるが、そうしたマクロな視点は個々の失業者を救わない。ここで個人の生命と幸福を保証するのが、国家権力による介入なのである。

一方、ヘーゲルは国家権力の運用の恣意性や、過剰な管理の危険性も認識していた。そこで彼は、一般にトップダウンである行政権にボトムアップの構造を組み込んだ国家を構想したので。このような解決策は私産の常識に反するが、さりとて、現体制がよりよい解決策たりえているとは言い難いだろう。

ヘーゲルの国家論は、全体主義的であると批判も向けられている。その一方で本書は、むしろ個人に配慮する視点があったと指摘した。入門でありつつ、著者らしい視点から国家と社会について再考できる一冊だ。(朝露)

(二五六頁 税込二六五〇円 7月刊)

実存主義者のカフェにて 自由と存在とアプリコットカクテルを

サラ・バイクウエル著
向井和美訳
紀伊屋書店



実存主義者のカフェにて
自由と存在とアプリコットカクテルを

一九三〇年代のバ
リ。三人の若き哲学
者がモンパルナス通
りにあるカフェへ

ック・ド・ガーズ」で看板メニューのアプリ
コットカクテルを飲みながら語り合っている。
ジャン＝ポール・サルトル、シモーヌ・ド・
ボヴォワール、レイモン・アロンがその三
人だ。ベルリンで現象学を学んだアロンはサ
ルトルにこう語りかける。「いいかい、わが
いとこの友よ。もしきみが現象学者だったら
このカクテルを語ってそれを哲学にすることに
ができるんだ」。この言葉に衝撃を受けた
サルトルはすぐさま近くの書店に走り、叫ん
だ。「現象学に関する本をすべて全部くれ！」。
こうしてドイツの現象学がパリのカフェに
伝えられたとき、現代の実存主義が誕生した。
それは生と一体化した哲学、人生と一体化し
た思想だった。「我々は何者なのか」「我々は
何を為すべきなのか」、それを実存主義は問
い続けた。本書はこれら二〇世紀哲学の二大
潮流「現象学」と「実存主義」の物語を「哲

学」と「伝記」を組み合わせた形で描い
た「哲学的伝記」である。サルトルに代表さ
れる実存主義者たちは時代と正面から対決し、
そこから自身の哲学を練り上げていった。彼
らは積極的に政治参加し、社会的発言も厭わ
なかった。それゆえその哲学を彼らの生涯や
当時の時代背景と切り離すことはできない。
晩年のサルトルは覚醒剤とアルコールを過
剰摂取することで文章を書き続けたという。
そうまでしても書きたいものが彼にはあった。
私たち二世紀を生きる人間は、その鬼気迫
る衝動を失ってはいないだろうか。(ばや)

(五九二頁 税込四一八〇円 4月刊)

日本人

柳田國男編
ちくま学芸文庫



大勢順応の国民性は
どこから生まれたのか

柳田國男

各地の民間伝承を
収集することで、歴
史資料に残らない、
平民の日常的な心性
や文化の変遷に迫る学問、民俗学。日本民俗
学の父と言われる柳田國男は、この内省の学
問によって、近代以降の日本の問題に対処し
ようとした。本書ではそんな彼と弟子たちが、

多岐にわたる論点から「日本人」について論
じている。例えば柳田は、日本人の「大勢に
従う」という性質の強さが、真の民主政治を
実現するための障壁になっていると問題提起
した。これは今でも、「行動を周囲に合わせる」
国民性としてよく話題に挙がるものだ。

さて、現代においてこうした性質は、しば
しば善悪の規準で評価されている。件の性質
について、時には規律正しさという「善」と
して称揚され、時には主体性の欠如という
「悪」として批判されるのを、読者も幾度と
なく耳にしてきたのではないか。柳田たちが
指摘した問題というのも、一見、後者の批判
のような文脈に乗ったものに思えるだろう。

しかし、本書を読むとその印象は変わる。
日本人が持つ絶対的に悪い特徴というもの
があり、そこに問題があるのではなく、国民性
と近代社会との不適合こそ問題があるので
はないか、と思わされるのである。

もちろん、その国民性を現代的価値観から
悪だと判じるのも一面的には正しい。しかし、
実際私達にそうした性質があるのなら、双方
を客観視し調節に励む方が建設的だ。本書は、
そのために書かれたのである。さもなければ、
先進的価値観に建前でのみ合わせるという失
敗を、私達は繰り返すだろう。

(三三六頁 税込一四三〇円 7月刊) (朝露)

生き延びるために芸術は必要か

森村泰昌著 光文社新書

カバールのそでに「M式・人生論ノート」とある。読み終えて意味を理解した。本書は「生き延びるためのノート」である。話は入り組んですっきりしない代わりに、押しつけがましい結論もない。ただ、「生き延びる」ことに「芸術」という切り口で向き合った、著者の思考の過程が綴られている。

著者はセルフポートレート作品で知られる芸術家。本書は、彼が大学や美術館で行った講演を、「生き延びる」ことを軸に再構成したものである。話題はゴヤから夏目漱石まで、絵画、写真にとどまらず、文学、SF映画と多岐にわたる。芸術家の導きで、また見ぬ作品に触れられるのも本書の魅力だ。

「芸術は不要不急か？」本書はこの問いに明確な答えを与えてくれない。中島敦の「名人伝」を引き合いに、問い自体を無効化してしまう。へそまがりな精神で煙に巻かれている印象さえ受ける。それでも、「勇ましくあれ」「役に立て」と迫ってくる彼に逆らわず、自分なりの生き延び方を見出そうとする芸術家の姿が本書に記録されている。(くたくた)

(二九六頁 税込二二〇円 4月刊)

戦後フランス思想

サルトル、カミュからバタイユまで
伊藤直著 中公新書

第二次世界大戦が終結した一九四五年から構造主義が台頭する六〇年代初頭にかけての戦後フランス思想は活気に満ちていた。サルトル、カミュ、ボーヴォワール、メルローポントイが実存主義や現象学の名のもとに次々と新たな著作を世に問うては論争を繰り広げ、その陰ではバタイユが神秘的で官能的な独自の思想を発展させていた。構造主義やポスト構造主義より一時代前の、フランス思想のうちひとつの黄金期、それが本書の対象だ。

戦後フランス思想の特徴は、哲学と文学の総合、そのジャンル越境性にある。たとえば実存主義の二大巨頭であるサルトルとカミュ。彼らはそれぞれ「哲学者」と「作家」の肩書きを持つが、サルトルは小説も、カミュは哲学的エッセイも書いた。彼らは狭い枠に閉じ籠もろうとは決してしなかった。カミュはこう助言している——「人はイメージによってしか思考しない。もし、あなたが哲学者になりたいのなら、小説を書きたまえ」。

本書の行間からは当時の知的雰囲気や華やかに香り立つ。当時の活気が蘇る。(ばや)

(二八〇頁 税込九九〇円 4月刊)

アフリカ哲学全史

河野哲也著
ちくま新書

アフリカ哲学——その具体的なイメージが浮かぶ読者はごくわずかだろう。それもそのはず、本書は日本で初めて「アフリカ哲学」を掲げた画期的すぎる著作なのだから。本書はアフリカを取り巻く思想の全体像を「哲学」として網羅的に紹介する入門書である。

文学運動ネグリ・チュードの中心にいたセゼールやサンゴール、植民地解放闘争を先導したファン、アパルトヘイト体制の解体を達成したネルソン・マンデラ。彼らは詩人や活動家、政治思想家として紹介されがちであった。本書が強調するのは彼らのつながりだ。

アフリカ人は奴隷制によって世界に散らばり、植民地主義と人種主義の暴力に晒されてきた。思想家たちは異なる状況に置かれながら互いの哲学を批判的に参照し、黒人の解放と尊厳の回復を叫び続けた。通史的に見ることで、思想の絡まり合いが浮かび上がってくる。

アフリカ哲学は本書の範囲を超え、現代も新たな思想を生み出し続けている。本書は、日本語圏に向けてその門を大きく開けたのだ。さらなる読書を喚起する一冊。(たいやま)

(四八〇頁 税込一四三〇円 7月刊)

偉大な魂——マハートマ・ガンディー

インド独立の父と呼ばれ、非暴力・不従従という理念に従って行われた運動を展開したマハートマ・ガンディー。偉大な人物として世界中で知られているが、彼の本名を知っている人はあまり多くないだろう。ここでは、多くの人から尊敬される存在であるモーハンダース・カラムチャンド・ガンディーの、人間くさい部分が垣間見える著書を紹介する。

M. K. ガンディーという人物の生々しい生き様を知るためには、『ガンディー自叙伝』（東洋文庫・全2巻）を読む必要がある。政治分野の功績に基づいて「マハートマ」という名前が与えられ、人々に知られるようになったガンディーは、ある種の苦痛を感じていた。そこで、人々に評価された政治的行動の基盤となった精神的実践について、国民に提示できるものを作りたいという強い想いで筆を取った。そして自叙伝として完成したが、自身が生涯行ってきた真理への実験についての記録である。若年期には先生の悪口を言い、親からの言いつけに様々な言い訳を並べて抵抗し、挫折を繰り返している、身近な人と何か近いものを感じるガンディー。そんな人物が何を経験し、どのように自らの真理を見つけようとしたのか。是非一読して感じ取ってもらいたい。

自叙伝は非常に主観的ではあるが、彼の半生を理解しようとするためには、ある程度ヒンドゥー文化にかんする基礎知識が必要となってくる。そこで、自叙伝に書かれている出来事を踏まえ、彼が実践したサツティーヤグラハ（真理を掴む意）を食、衣服、性、宗教として家族という身近な日常の実践に焦点を当てて詳しく説明し

たのが『ガンディーの真実——非暴力思想とは何か』（ちくま新書）である。集団的不従従運動全般の概要はもちろん、ガンディーによる幼児婚の実践や、非暴力思想についてロシア人文豪・トルストイに受けた影響など、幅広い情報が得られる。そして、何よりも注目されるキーワードとなるのが、ガンディーの「自己中心性」である。独立を目指した多くのインド人を非暴力・不従従という信念の元率いるためには、これを買く強固な意思が必要不可欠であった。しかしその一方で、周りの意見を聞き入れずに価値観を押し付けるという一面も持っていた。この一面は特に家族に対して向けられることが多く、ガンディーと家族のあいだに生じていた確執なども如実に見る事ができる。

ここまでガンディーの人間味あふれる部分、どちらかというとながティブな側面ばかりを取り上げてきたが、誰がなんと言おうとガンディーの理念と生き方は、社会運動家をはじめとする様々な人に対して影響を与えてきた。そんな彼の生き様を時系列にまとめたものが『ガンディー 平和を紡ぐ人』（岩波新書）である。ガンディーが実践した塩の行進や、各地での仲裁の様子、そして防ぐことのできなかつた暴力行為への嘆きなどが描かれる。

ガンディーの運動には様々な評価と意見が存在するが、彼のようになんか他人のために犠牲にし、武装解除や憎しみの連鎖を生じさせないように人々に言葉をかけ、最後の瞬間まで神を信じられる人は多くない。評者にはまず無理である。そんな尊敬すべき彼の生き様の、表裏一体のようで乖離している両側面を深く理解できる日が来るのだろうか。

文学の遠くと近く——京都文学レジデンシー開催に際して

九月二八日（土）から一ヶ月にわたり、京都文学レジデンシーが開催される。「レジデンシー」という言葉には馴染みのない人も多いので説明しておこう。実行委員会代表の吉田恭子教授（本学・人間環境学で現代英語圏文学を研究している。）の言葉を借りると、「芸術創作や人文・自然科学研究専念のため大学キャンパスなどに長期滞在する制度」のことだ。第三回を迎える今回は、アメリカ、ヨーロッパ、東南アジア、オセアニアから、様々な国籍と性別からなる総勢十人の作家・翻訳家が京都に滞在して作品を執筆し、その成果を朗読イベントなどの形で発表する予定である。

そのうちの一人、イタリアから訪れるダリオ・ヴォルトリニによる短編「エリザベス」は、現代イタリア文学の短編アンソロジー『ここが、安心できる場所です』に収められていて気軽に読むことができる。そこで語り手（と読者）はいきなり、奇妙な状況に放り込まれる。家の門をまさにくぐらうとして語り手は、ナイフで刺されたように見えなくてもない体勢でお腹を抑えつつ歩く移民女性に目を奪われ、彼女を助けるため奇妙な一夜を過ごすことになる。語り手はどこか放心状態のようでもあり、過去に囚われているようでもありながら、それでも自らの五感に鋭敏なところも見せる。この感覚のささいな、でも確実にそこにあるゆがみは、私たちの生活に慣らされた感覚に新鮮な驚きを与え、作品を読み終えた後に目にする日常をも、新たなものにしてくれる。

とはいえ、そのような内向的な部分だけがこの作品の（ひいてはこのアンソロジーの）魅力なのではない。語り手が一晚のあいだ関わることになる移民女性の姿は、現代イタリアをとりまく経済や民

族、医療の様々な問題を言葉少なに、けれど雄弁に描いているし、ほかにも収録作「働く男」では、資本主義経済がイタリアにもたらした歪みと、それに抗う主人公の決意が描かれることで、社会の抱える問題からもけって目を背けようとするしない、現代イタリア文学のある傾向のようなものが浮かび上がってくる。

そして、このような様々な問題が文学を通じて描き出されるとき、それらがまるっきりの「他人事」になってしまわないの这一点にも、注意を促しておきたい。文学レジデンシーに参加する作家たちによる推薦本リストに目を通したとき、そこで目に入ったのは意外にも、僕らが知っている——読んだことがなくても聞いたことがある——作家や作品の名前だったのだから。たとえば先ほどのヴォルトリニの推薦本には太宰治の『津軽』が含まれていたし、他の作家の推薦本には芥川や、川上未映子の名前もあった。そして参加者の一人、ポリ・バートンは現代日本の女性作家の文学（松田青子・山崎ナオコら）の英語への翻訳者でもある。他には、ポール・オースターなど、海外文学好きには馴染みの名前も。つまり、世界の作家も、僕たちが感動したのと同じ作品を読んで感動し、それを自らの身に引き受けて新たな作品を今現在も生み出し続けているということになる。世界の正反対で書く作家も、向き合う問題はそれぞれでも、僕たちと同じ作品から（も）力をもらって書いているのだらう——それってもしかして、すごく感動的なことなんじゃないだろうか？

（後記：京都文学レジデンシーや、関連イベントの情報は、SNS、noteなどで随時更新されますのでそちらをご覧ください）（コーク）

編集後記

京大作家インタビューはお楽しみいただけましたか？ さて、時は遡り 2018 年の 4 月。新入生の私は総人の英語リーディングの初回授業にて、友達作りは第一印象が肝心！と勇気を出して隣の席に座る青年に話しかけました——彼こそ、当時すでに作家デビューしていた青羽悠。「かっこいい何者かになりたい！」と田舎から出てきた私のチンケなプライドは、鴨川の桜が散るよりも早く砕け散りましたとさ（めでたしめでたし）。ほろ苦い思い出ですが、これもまた今回の特集を導いてくれたかけがえのない「つながり」です。

さて、ここでは紙幅の都合で誌面に収録できなかった溢れ話を。彼はインタビューのなかで、京都は本質的で愛情深い土地なのだ——つまりは“ヒューマニズム・シティ・キョート”だと冗談めかして——語りました。自分自身が愛するもの、価値を感じるものを誠実に模索し、表現すること。その営みが意味を持って息づいているからこそ京大では独自のものが生まれうるということに、彼は京都を離れてから気づいたと言います。

我々が毎月綴るこの言の葉が、読者の皆様にとって価値ある本との出会いの支えとなれば望外の喜びです。そのためにも本誌は愛情深い書評誌であり続けたいのです。（浅煎り）

当てよう！ 図書カード

今号は、第四弾となる京大作家インタビューで、青羽悠さんにお話を伺ってきました。紙幅の関係で削らざるを得なかったのですが、インタビューの中では、螺旋や円環のモチーフに関して、最近話題のある作品の名前が上がり盛り上がりました。さてその作品はどれでしょうか。

1. 『罪と罰』
2. 『みどりいせき』
3. 『百年の孤独』
4. 『失われた時を求めて』
(コーク)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から 5 名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは 11 月 15 日です。



《6月号の解答》 6月号の問題の正解は、4. の学ぶ、でした。ここから派生した古典ギリシア語の mathematikos という語を現在の mathematics の意味で一般化させたのはアリストテレスのようです。図書カードの当選者は、ぼちょむチキンさん、いいみょんさん、あめしるこさん、天ぷらそば大盛りさん、いわさんの 5 名です。当選おめでとうございませう。（荒砥）

読者からひびく

○6月号「私の本棚」(ばやしさん)を読んで、偶然性について考えを巡らせました。偶然性を肯定する、し続けることの難しさ、強さを思い茫然としました。私はまだ偶然性を恐ろしく感じています。いつか肯定できるようになるかしら。(文学研究科職員・青でんぶ)

——偶然性を肯定することは、これまでの出会い、自分が歩んできた人生、そして果ては今生きている世界の肯定にもつながると思います。必然よりもずっと多くの偶然から成っているこの世界と、そうあったかもしれないけどどうもそうはならなかった世界、恥の多い人生を歩んできた自分が、全てを受け入れるにはまだまだ時間がかかりそうです。

○本の話がたくさん読めて楽しい！

(理学部・えび天天)

——シンプルに「楽しい」、ありがとございます！ 自分は義務感に駆られて読書をすることも多々ありますが、小説であれ、研究書であれ、本やそれにまつわるものを読むことは「楽しい」ものであってほしいです。これからも読者の皆さんに「楽しい」と思っ頂けるような紙面づくりに編集委員一同励んで参ります！

(荒砥)